

## 〈新刊紹介〉

田中牧郎著

### 『そうだったんだ！日本語 近代書き言葉はこうしてできた』

「そうだったんだ！日本語」シリーズの第6巻。『太陽コーパス』を用い、明治後期から大正期にかけて近代書き言葉がどのようにしてできたのかを明らかにする書。『太陽』は、1895年、多彩なジャンル、一流の執筆陣で創刊され、日本社会の近代化に大きな影響を与えた総合雑誌である。言文一致、新語の誕生と廃れ、似た意味を持つ言葉の縄張り争いの過程を、コーパス言語学の手法で具体的に捉える。

「第一章 近代書き言葉の成立事情」、 「第二章 口語体書き言葉の成立」、 「第三章 言葉の栄枯盛衰」、 「第四章 言葉の縄張り争い」、 「第五章 現代書き言葉へ」の五章からなる。

(2013年8月23日発行 岩波書店刊 B6判縦組み 212頁 1,700円+税 ISBN 978-4-00-028626-8)

今野真二著

### 『言海』と明治の日本語』

本書は、大槻文彦による『言海』の分析をとおして、明治期の日本語に関しての知見を得ることをめざし、その姿を描き出したものである。第1章から第3章では、『言海』は明治期における「語と語との結びつき」を積極的にいかしながら編纂されていることに注目して分析を行い、『言海』の語積中に使われている漢語、語積末の「漢用字」に着目することで語と語との結びつきがさらに明らかになると指摘している。第4章では、『言海』と近い時期に刊行されている三つの辞書や漢語辞書との対照を行い、同時期に刊行されている複数の辞書の記事を重ね合わせていくことによって、明治期の日本語全体の語性をとらえている。末尾の「おわりに」では『言海』処方箋 (prescription) という副題のもと、『言海』を使った今後の分析に向けて、『言海』の資料性や利用の注意点を述べる。

「第一章 『言海』の体例」、 「第二章 見出し項目について」、 「第三章 語釈」、 「第四章 他の辞書体資料との対照」、 「終章 『言海』の資料性」。

(2013年9月10日発行 港の人刊 四六判縦組み 286頁 2,800円+税 ISBN 978-4-89629-264-0)

木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ編著

### 『方言学入門』

本書は大学などで方言学を学ぶ人のテキストとして、高校生あるいは一般向けの方言

の入門書として刊行された。多くの図表を収載しつつ、地理的なことばの違いと同時に、方言が社会の中でどのように位置づけられているかについて概説する。

「第1章 地図から見えることばの地域差」では、方言区画、東西差、分布パターン、グロットグラム調査を取り上げる。「第2章 ことばの仕組みから見える地域差」では、音声、アクセント、イントネーション、文法、オノマトペの地域差を取り上げる。「第3章 コミュニケーションから見えることばの地域差」では、あいさつ、談話、昔話、待遇表現などを取り上げる。「第4章 社会の変化から見えることばの地域差」では、共通語化・標準語化、使い分け、中間方言、新しい方言などを取り上げる。「第5章 「方言」から見える日本の社会」では、方言の社会的位置づけ、地域資源としての方言、言語意識、ヴァーチャル方言と方言ステレオタイプ、方言コスプレ、方言研究の社会的意義などを取り上げる。末尾の「調べてみよう」では、方言研究における具体的な研究テーマを紹介する。

(2013年9月10日発行 三省堂刊 A5判横組み 144頁 1,800円+税 ISBN 978-4-385-36393-6)

#### 多言語化現象研究会編

### 『多言語社会日本——その現状と課題——』

本書は、移民の増加とともに日本で進行しつつある「多言語化」をキーワードに、日本語・国語教育、母語教育、言語福祉、言語差別などを解説する「多言語社会」言語学入門書である。

定住性を帯びた「生活者としての外国人」の増加に伴い、社会言語学でも日本の言語状況を構成するメンバーとして関心が向けられつつある。現代は多言語化、多言語社会、多言語主義、多言語政策、多言語サービスなどにみられるように、「多言語」が飛びかっている。周囲で進展しつつある事実在即しながら、従来の社会言語学ではあまり扱われることのなかった日本の多言語性という問題について多様な視点から解説する。

「はじめに 多言語社会日本——その現状と課題——（多言語化現象研究会）」、「第1章 多言語社会のとらえかた——いくつかの視点——（庄司博史）」、「第2章 言語マイノリティ——地域の少数言語を中心に——（原聖）」、「第3章 国語と日本語政策（安田敏朗）」、「第4章 多言語政策——複数言語の共存は可能か——（庄司博史）」、「第5章 多言語サービス・多言語支援（藤井幸之助）」、「第6章 移民の母語教育（高橋朋子）」、「第7章 日本語教育（平高史也）」、「第8章 多言語能力と外国語産業（岡戸浩子）」、「第9章 言語接触と言語混交（ダニエル・ロング）」、「第10章 エスニック・メディア——移民の言語活動とメディア——（中野克彦）」、「第11章 言語福祉という視点——情報弱者を生まないために——（相澤正夫）」、「第12章 言語意識とコミュニケーション（オストハイダ・テーヤ）」、「第13章 言語差別とは何か（山下仁）」、「第14章 言語コミュニティ」,「第15章 関連トピック」。

(2013年9月10日発行 三元社刊 A5判横組み 294頁 2,500円+税 ISBN 978-4-88303-349-2)

中澤信幸著

## 『中近世日本における韻書受容の研究』

近世前期の漢字音研究について、韻書『古今韻会挙要』の受容に注目し、一側面を明らかにする書。

韻書・韻図は仏教教学における經典の読誦音研究、また儒学における漢籍の読書音研究において多用された。従来の研究は、韻図の代表格である『韻鏡』を中心に解明が進められてきたが、それ以外の韻書の受容という点では不明な点が多かった。『広韻』とともに、中近世の日本において仏教教学を中心に広く利用され続けた『古今韻会挙要』の受容に光を当てる。

「序章 日本における韻書受容史」、「第一章 中世の法華經字音学における韻書受容の実態」、「第二章 法華經字音学における『古今韻会挙要』の受容について」、「第三章 法華經字音学における伝統音と韻書の実際」、「第四章 法華經字音学における『韻鏡』の扱いについて」、「第五章 日遠の声調と清濁卓立表示について」、「第六章 日遠『法華經隨音句』における「呉音」「漢音」、「第七章 「転図字書」の発生と盛典——『韻鏡研究』における理論と実用——」、「第八章 『磨光韻鏡』と『磨光韻鏡字庫』」、「第九章 近世に流布した『広韻』について——「沢存堂本」流布の時期を探る——」、「第十章 なぜ『古今韻会挙要』は近世後期になって使われなくなったか」。

(2013年9月25日発行 おうふう刊 A5判縦組み 256頁 12,000円+税 ISBN 978-4-273-03725-3)

渋谷勝己・簡月真著

## 『そうだったんだ！日本語

旅するニホンゴ——異言語との出会いが変えたもの——』

「そうだったんだ！日本語」シリーズの第7巻。海外における日本語の姿を描く書。世界にはさまざまな日本語がある。新天地を求めて海外に移住した日本人とその子孫の使う日本語や、日本の統治下で日本語教育が行われ、日本人が去った後、現地の人々の共通言語として使われるようになったことば。ハワイ、カナダ、ブラジル、台湾、パラオなど、現地の人々の生活に今も息づくニホンゴを見つめ、「日本語」とはどのような言語であるかを問い直す。

「第一章 海外に飛び出した日本語」、「第二章 ハワイ——多言語に囲まれた暮らし——」、「第三章 カナダ——分散する日本語——」、「第四章 ブラジル——日本語をめぐる葛藤——」、「第五章 台湾——独り歩きする日本語——」、「第六章 パラオ——標準語をめざして——」、「第七章 世界の日本語を科学する」。

(2013年9月25日発行 岩波書店刊 B6判縦組み 208頁 1,700円+税 ISBN 978-4-00-028627-5)

文化庁文化部国語課著

『国語に関する世論調査 平成 24 年度  
日本人のコミュニケーション 世論調査報告書』

本書は、現在の社会状況の変化に伴う日本人の国語意識の現状についての調査を行い、その結果をまとめた報告書である。調査時期は 2013（平成 25）年 3 月 9 日～3 月 24 日、調査対象は 16 歳以上の男女で、3 千人を無作為抽出し、2,153 人から有効な回答を得た。調査方法は、調査員による面接聴取で、次の項目について調査を行った。(1) コミュニケーション、(2) 外来語や外国語などのカタカナ語、(3) 国語に関する知識や能力、(4) 文字の手書き、(5) 手紙の作法、(6) 言葉遣い・言葉の意味や使い方、(7) 異字同訓の漢字の使い分け、(8) 慣用句や言葉の意味について。調査結果は、項目ごとの回答が、百分率によるグラフと実数などで、回答者の居住地域別・年層別・性別に示されている。また、項目ごとに、調査意図と結果の分析考察が付されている。なお、調査結果の概要が文化庁の web ページで紹介されている。

「Ⅰ. 調査の概要」、「Ⅱ. 調査結果の概要」、「Ⅲ. 調査票」、「Ⅳ. 標本抽出方法」、「Ⅴ. 集計表」。

(2013 年 9 月 30 日発行 ぎょうせい刊 A4 判横組み 142 頁 3,000 円＋税 ISBN 978-4-324-09755-7)

相澤正夫編

## 『現代日本語の動態研究』

国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の解明」の最初の成果物として刊行された。「現代日本語」の「動態」に関わる多彩な研究の成果を 12 編の論文としてまとめた論文集である。

「第 1 部 動態研究の実際——分析対象の側面から——」は、〈語・慣用句〉について、「動詞ヒモトクにおける伝統用法と新用法の共存（相澤正夫）」、「外来語動名詞「チェック」の基本語化——通時的新聞コーパス調査と意識調査の結果から——（金愛蘭）」、「慣用句“気がおけない”の「誤用」について（新野直哉）」、〈文法・表現〉について、「サ変動詞の五段活用化・上一段活用化の現状（松田謙次郎）」、「新聞データ（朝日『聞蔵』）に見る「なく中止形」の動向（金澤裕之）」、「“道理に合わない”授受表現の使用と動態——愛知県岡崎市での経年調査および最近の全国調査から——（尾崎喜光）」、「第 2 部 動態研究の基盤——データと分析手法の側面から——」は、〈コーパス調査〉について、「探索的データ解析による言語変化研究——蛇行箱型図による S 字カーブの発見——（石井正彦）」、「現代日本語における外来語表記のゆれ（小椋秀樹）」、「分かりにくい医療用語の類型と語の性質（田中牧郎）」、〈対人調査〉について、「方言と共通語に対する意識からみた話者の類型——地域の分類と年代による違い——（田中ゆかり・前田忠彦）」、「「とびはね音調」はどのように受けとめられているか——2012 年全国聞き

取りアンケート調査から——(田中ゆかり)], 「NHK アナウンサーのアクセントの現在——複合動詞を中心に——(塩田雄大)」。

(2013年10月10日発行 おうふう刊 A5判横組み 264頁 2,500円+税 ISBN 978-4-273-03737-6)

近代語学会編

『近代語研究 第十七集』

近代語学会による論集『近代語研究』の第17集である。室町時代周辺から現代に至るまでの日本語について計27編の論文を収める。

「堪能(たんのう)」の語史——「足んぬ」の体言化をめぐる——(坂詰力治)], 「『玉塵抄』における「ばかり」の用法(山田潔)], 「成城大学図書館蔵狂言「骨皮」「墨塗」の性格と表現(小林千草)], 「狂言台本の「アマリ(二)」——大蔵虎明本を中心に——(田和真紀子)], 「大蔵流狂言虎明本の要求・依頼の表現について——(サ)シメを中心に——(米田達郎)], 「近世節用集史の俯瞰のために——研究序説——(佐藤貴裕)], 「貞享期西鶴本の仮名遣い——『諸艶大鑑』と『好色一代女』の場合——(久保田篤)], 「「神ならば」——条件の提示——(岩下裕一)], 「「江戸ことば」の地誌——下町ことばと山の手ことば——(土屋信一)], 「近世後期江戸語における逆接表現旧形式「ド」「ドモ」について(宮内佐夜香)], 「漢籍国字解『唐詩選国字解』とその異本——服部南郭は『唐詩選国字解』の講述者ではない——(浅川哲也)], 「滝沢家日記の自称詞(大久保恵子)], 「「おもおせ(面伏)」という語(鈴木丹士郎)], 「『式亭雑記』諸本に関して——八種の抄録写本の調査から——(長崎靖子)], 「『吾輩は猫である』における係助詞「は」の融合転化(小松寿雄)], 「鉄道線名の形成と変化(鏡味明克)], 「語源の型に関する一考察——『新明解語源辞典』『暮らしのことば新語源辞典』の植物語彙四一五項目を手掛かりに——(園田博文)], 「富田源太郎著『英和婦人用会話』にみられる助動詞「ウ」+終助詞「ワ」について(常盤智子)], 「中国へ伝播した二十世紀初頭の日本の哲学用語——『哲学大辞書』と中国の宣教師が編纂した術語集の比較——(真田治子)], 「近代総合雑誌記事に出現する一人称代名詞の分析——単語情報付き『太陽コーパス』を用いて——(近藤明日子)], 「東京語の明治時代(田中章夫)], 「ジャからヤへ——明治大正期間関西指定表現体系における「標準語化」の影響——(村上謙)], 「尊敬表現形式「お(ご)～になる」系の使用——江戸末期から明治20年代まで——(山田里奈)], 「「お／ご～申す」と「お／ご～する」——働きかけのあり方とその消長——(伊藤博美)], 「『和蘭字彙』に見られない『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語——その1: Medhurst 英華字典の訳語をそのまま用いている訳語——(櫻井豪人)], 「心学道話における口語要素について——文末文節の構成比較による試み——(山口豊)], 「条件表現史における近世中期上方語ナレバの位置づけ(矢島正浩)」。

(2013年10月20日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 550頁 16,000円+税 ISBN 978-4-8386-0267-4)

益岡隆志著

## 『日本語構文意味論』

筆者が長年関心を持ち続けてきた「構文意味論」の課題に取り組む書。文の基幹的構文である「構文」について、日本語を対象に補助動詞構文・叙述の類型・複文構文の3点を柱としてその意味分析を試みる。

「序章」, 「第1部 叙述をめぐる」は, 「前編 コト拡張」, 「第1章 モノとコトの関係性——コト拡張をめぐる——」, 「第2章 コト拡張から見た恩恵構文」, 「第3章 コト拡張から見たノダ構文」, 「後編 叙述の類型」, 「第1章 事象叙述と属性叙述」, 「第2章 Nノコトダカラ構文の意味分析」, 「第3章 属性叙述と主題標識」。「第2部 複文構文をめぐる」は, 「前編 連用複文構文と連体複文構文」, 「第1章 複文構文と接続形式」, 「第2章 接続形式から見た原因理由構文の構図」, 「第3章 連体複文構文における関係の意味」, 「後編 連用複文構文における接続形式の分化」, 「第1章 条件構文と接続形式の分化」, 「第2章 中立形接続とテ形接続の分化」, 「第3章 原因理由を表すダケニとダケアツテの分化」。「終章」, 「補説A ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティとその相関」, 「補説B 尊敬構文の構図」, 「補説C 日本語動詞の活用・再訪」, 「補説D 連体節と文の意味階層構造」。

(2013年10月21日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 304頁 3,800円+税 ISBN 978-4-87424-602-3)

杉本つとむ著

## 『蘭学と日本語』

江戸期の蘭語学研究に関する著者の長年の研究をまとめた書である。

中野柳圃を中心とした江戸期の蘭学者は、近代の日本文化、科学を発展させる基礎となる蘭語学を確立した。西欧科学の導入と学習に、蘭学者が築いた翻訳の土台は大きく貢献している。その学問の軌跡の一端をまとめた論文集。三部の論考は、『蘭語学とその周辺』（杉本つとむ日本語講座5）の再録である。資料として『訳鍵』, 『乾坤奇観』, シーボルト蒐集“日本の書物目録”の影印を収録する。

「第一部 中野柳圃と言語研究」, 「第二部 蘭語研究・翻訳と近代日本語の創造」, 「第三部 蘭語研究・学習と新資料」。

(2013年10月25日発行 八坂書房刊 A5判縦組み 538頁 6,800円+税 ISBN 978-4-89694-159-3)

山東功著

## 『そうだったんだ！日本語』

日本語の観察者たち——宣教師からお雇い外国人まで——

「そうだったんだ！日本語」シリーズの第8巻。西洋人による日本語研究の歴史につ

いて紹介し、日本語への相対的な視座を提供する書。日本人による日本語研究の歴史「国語学史」にも触れつつ、大航海時代に来日した宣教師たちから、オランダ商館の人々、幕末の外交官、明治のお雇い外国人まで、日本語観察を行った西洋人の「日本語学史」を追う。鋭い〈外〉からの視点は、国内の研究者たちに日本語を相対化し探究する動機を与えることにもなった。LとRの発音の区別がない、格変化や性・数の別がないと驚きながらも、辞書や文法書を作り、海外に日本語研究の種を播いた彼らに光を当てる。

「第一章 日本語は国内でどう見られてきたのか」、 「第二章 宣教師言語学の時代」、 「第三章 オランダ商館から見た日本語」、 「第四章 ヨーロッパの日本語学者たち」、 「第五章 幕末外交官と宣教師の日本語」。

(2013年10月25日発行 岩波書店刊 B6判縦組み 228頁 1,700円+税 ISBN 978-4-00-028628-2)

エミール・バンヴェニスト著、阿部宏監訳、前島和也・川島浩一郎訳

『言葉と主体——一般言語学の諸問題——』

一時代を築いた言語学者エミール・バンヴェニスト (Emile Benveniste (1902—76年))。1974年の著作 *Problèmes de linguistique générale II* の全訳である。岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』(みすず書房1983年)収録の論文と併せ、一般言語学関連の論文37編は、そのほとんどが日本語に翻訳されたことになる。

記号学、発話理論、言語との関係における社会構造分析など、その研究はバルト、フーコー、ラカン、さらにはアガンベンにまで至る数多の思想家に刺激を与え続けてきた。1965年から1972年にかけて発表された論考、インタビュー、講演など、20篇を収める。

「第I部 言語学の変遷」、 「第II部 コミュニケーション」、 「第III部 構造と分析」、 「第IV部 統語的機能」、 「第V部 言語の中の人間」、 「第VI部 語彙と文化」。

(2013年10月30日発行 岩波書店刊 A5判縦組み 318頁 7,000円+税 ISBN 978-4-00-022930-2)